
「お、俺の サイダー!!」

ドボク

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「お、俺の サイダー！！」

【Zコード】

Z3468F

【作者名】

ドボク

【あらすじ】

・一日の頑張った自分への「」褒美。・自分自身を追い込んでその先にある快樂。よくある高校生のこだわりを書いた物語です。

【8月30日】 夏の終わりに近づいていたが、今年の夏は例年に比べてカラッとした暑さが続くそうだ。朝のお天気ニュースを横目で流しながら大杉武は学校に向かう準備をしていた。エナメルバッグを自転車のカゴに強引に入れて家をでた。

千葉にある私立の高校。銘南高校に武は通っている。生徒数1280人 普通科、総合学科、農業科の3つで大まかにまとめている。この銘南高校は特にスポーツが盛んで地元では、けっこ有名である。

そんなスポーツ校に武はサッカー部に所属している。

中学のときもサッカー部だからそのままサッカー部に所属したが銘南校のサッカー部員は128名と県一番を誇っている。武は2年生だがまだレギュラーどころか補欠にもなっていない。周りのみんなは、必死になつて練習するが武はどうでもいいみたいだ。

練習は厳しいが大好きなサッカーができるし部活友達もたくさんいる。それに合宿や試合の応援などで、いろいろな地域に行けるからだ。オレはここでサッカーをするだけで満足だ。レギュラー達は試合前はずつとピリピリしてるし合宿はオレ達よりずつときつい練習をしている。それならいろんな地方へ行つてうまいもん食べて遊んだほうがいいや。そうやって2年間やつてているうちに北は北海道から南は沖縄までと大抵の場所に行つた。

そんなオレの最近のお気に入りは地方で製造された地方限定ジュークスだ。例えばこの前の愛媛県に合宿に行つたときに買った、ミカンジュース、はうまかったなあ

『伊予かんで絞つた果肉入りジュース!』

ビン売り

で1リットル1500円もしたけどあれはすごくうまい!

他にも青森のりんごジュース、アカアオリんご、や岡山の、倉敷！桃タロウジュース、大分の、別府真ん丸カ・ボ・ス、などの有

名な物のからキワモノまで値段が張るものばかりだったけど色々なものを飲み干してきた。

そしてこの前の練習試合に秋田に行つたときの事だった。

そのときオレはなぜか運悪く試合のメンバーに入つていて試合ばかりで2日間なにもできない状態だった。

しかしこでめげるオレではなかつた。秋田から東京行きの新幹線に30分ほどの空き時間がたのでオレはすかさず駅のホームのお土産品のところに行つたがそこは5階建てのスーパーと合体していって、すごく広かつた。

これは迷うかなあ と思つていただけど幸い駅と繋がつているフロアにお土産品が置いてあつた。オレは肩に背負つているエナメルバックの重みを忘れてスキップしながら品物を見て回つた。

試合の疲れなど一気に吹き飛んでいた。

見たことのない地元特有の食べ物やおかしにオレは「このためにサッカーやつてるようなもんだよ。」と品物を見定めていた。

しかしそんなに時間がないことに気が付いた。

オレは慌てて特産品の飲み物を探した。

すると試食コーナーのところに小さい紙コップに水が入つていてのがいくつかあつた。近づいて見てみると水じゃない。

サイダーだった。

サイダーか… そういえば最近飲んでないなあ
紙コップにあるサイダーを持って少しだけ飲んだ。

!!!!!!

このときオレに衝撃が走った。

口にサイダーが入った瞬間、炭酸が口の周りを浸透し洗練された水と上品な炭酸の量。

オレは言つまでもなくこのサイダーに感動したつ！！

市販で売っているサイダーや炭酸飲料水とはまったく違っていた。残り時間があと10分近くになつていた。

オレはこのサイダーを集中買いすることにした。急いで店員さんに置いてある場所を聞いた。

商品の名前は、似手湖サイダー と書いてあった。300//リリットルの小さめのビンで298円とあつた。オレは迷つことなく店員に言った。

「じゃあこれ5本…いやつ6本下さい…」

容器はビンだからそんなに多くは持てれないし値段的にもこれが妥当かな。

そういうと背の低い50前後のオバサン店員は氣まずそうな顔で「すいません、これ、今は2本しかないです。地元の人にも人気なので…」

「ええ、マジですか！！」

オレはショックで人がたくさん行き交うホームで大声を出してしまつた。店員は取り繕うかのように他の店舗ならまだあるかもしれない。と言つたがもう時間がない。オレは金を払い急いで新幹線に乗り込んだ。

他のサッカー部の奴らはもう席について弁当を食べていた。この1分後に新幹線は東京へと向かい出した。

オレもみんなと同じように買い置きしていたオーギリとサンドイッ

チを手提げバックから取り出してゆっくりと動き出す景色を眺めながら、似手湖サイダーと一緒に食べた。

千葉に帰ってきてからは遠征の都合により3日間、放課後の練習は自主レンとなりずつと体力調整となっている。

そして、今日から本格的な練習が始まる！！

いつものオレなら、練習とつづ單語を聞いただけで、テンションが急降下する。

しかし！

‘収穫’があつたときのオレは違う！

いつもと違うテンション

いつもと違う体の動き

いつもと違う先輩・監督へのアイサツ

すべてが違う！

なぜなら今オレの家の冷蔵庫の卵コーナーの下のめんつゆの隣には、あの‘似手湖サイダー’があるからだああ
だからこんな日の練習はどんなにきつても頑張れる。
その上水分は一滴も飲まない。

このこだわりが‘似手湖サイダー’をより旨くする。

練習が終わった後シャワーを浴びるのだが先輩達が使うのでオレらは部室の近くにある水道の蛇口を上にひねりスパツツだけの状態で水浴びをする。冷たいけどそこそこ気持ちいいし汗臭いまま帰るよリマシだ。

この男子にしかできない特権が終わった後は、いつもならコンビニ

寄つたり仲のいいヤツらと一緒にゲーセンや買い物に行つたりするのだが今日はチャリに乗つてまつすぐ帰る。そんで制服のままで飯も風呂も後にする。オレの経験上一つの欲が満たされたら他のモノへの興味が薄れてしまうからだ。

だから家に入つたらすぐに冷蔵庫までダッシュして、アイツ、を飲み干してやる！

よし！ それが今日のプランだ。そうやって考えていると体育職員室から監督とコーチが何か話しながら生徒前にやって来た。3年生の鈴川キャプテンが集合の合図を出し監督とコーチの前に綺麗に整列をした。

「え、この前の遠征では新しい選手を基本としたゲーム運びをした。したがつてあれを……

また始まった。監督のぼやきだ。めんどくせー イレあと20分は話すだらうなあ

武は校舎の壁に貼りりてある時計に目をやつた。

4時50分か

今日は3時間練習だといいなあ。

監督のダラダラとした話しあは案の定20分を超えて結局5時からスタートすることになった。

メニューはいつも通りだった。

最初は軽くグランドを5周走り、リフティングとドリブル練習、ポジション別の指導練習。

ここまでは、予想通りの練習だ。

勝負は

ここからだ。

校舎の時計が7時半を回った。

キヤプテンの鈴川先輩の集合の合図で始まった。ラスト30分の補強だ。

最初は3人で1グループの編成で他のグループと競走する。負けた方は勝つたヤツをおんぶしてトラック1周を走る。

これを3セット。

このあと20メートル間にコーナーを建てて合計80メートルを幅跳び、片足ジャンプ右左、そしてダッシュ。

3人のローテで回るから 4セット目になつた時点でもう息があがつていい。

だが似手湖サイダーを飲むにはもつともつと走らないといけない。自分に気合いを入れ直し真っ暗になつた空に顔を上げ

「ラスト 5本!!」と叫びまた走った。

武が補強に夢中になつていてる時、後ろでコーチが咳いていた。

「どうです思います? アイツ? 僕から見たら面白い人材だと思つんですけど」

パイプ椅子に座つて武の方を見据えて言つた。

「大杉武か…ワシもこの前の遠征で気になつてな、ずっと観察しそつたんじや」

「そうですか。しかし監督がすぐに試合で使わないとなるといいくつか問題点があるんですね?」

「ウム。あの大杉武といつ生徒は調子のバランスが悪すぎる。」

「一チは間髪入れず聞いた。

「調子のバランスですか？」

「ああ、奴はな試合でやるプレーの浮き沈みが激しすぎるんじゃ。例えば1日は3年生にも匹敵するぐらいの試合運びが出来るのに2日になるとパスも出せないようなプレーをする。前者の力を毎試合引き出せたら奴は銘南高校の、キーマンになる男じゃな。」

「じゃあ監督アイツを…」

「ちと辛いがウチの特別強化選手になつてもらおうか。」

監督と一チが遠くで武の将来を話しているこの本人の武は補強メニューが終えてグランドを歩いていた。

「全員つ集合……」

「これで本日の練習を終わりますつー！ 礼…！」

「お、終わった…」

武は疲れきった顔で部室に戻つた。

「よしー。」

顔を手のひらで叩き練習着をバックに詰め込み自転車に乗つた。

「お先でーす。お疲れさまでしたー」

先輩の挨拶もそこそこに学校の門を出た。

自転車で走ると夜空に少し冷たい風が熱くなつた体を冷ましてくれた。

もうそれからだ。

この角を曲がれば家に到着だ。緊張に似た興奮が抑えきれずにいた。足早に玄関から例のお宝のある所に移動した。

「二、ノムニ用サノガニ」

「今から！オレが飲み干してやるううう」

いい年して近所迷惑も考えずに大声をだしてしまった。
そして勢いよく冷蔵庫の扉を開けたつつ！！

ん？

あれつ？ない。確かに朝入れたはずなのに……

あつ！・！・！・！・！・！・！・！

オレはすぐさま2階に駆け上がり、親父の部屋に入った。

するとそこには本来オレが飲むべきだったはずの似手湖サイダーが、パジャマを着てベッドに横たわって雑誌を読んでいる親父の手にあった。

「おお武か。これうまいなあ。どこのスーパーにあつたんだ？ また買つてきてくれよ。」

メロスは激怒した。
否、武は激怒した。

「オヤジイイイ————！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3468f/>

「お、俺の サイダー!!」

2010年11月8日05時55分発行